

自蹊庵便り

令和六年 長月

NO 169

「淡き水の如き茶事とは……」

今月も何とか無事に夕ざりの茶事を終えることができました。…とは申しますものの、夕ざりの茶事の度に心よぎりますのは、夕ざりほど悩ましき茶事は無きかと…。

何がどのように悩ましいのか…。

夕方五時を席入りとしているのですが、そして夏至に至る十日から二十日ぐらい前あたりが、暮れなずむ景色との呼応が絶妙であるかと…。さりながら、それがなかなかなのです。天気を読むといえますか、その日、その日のありようで、心働きのいることにごさいます。五時の席入り、懐石、炭、菓子を済ませ、六時半から七時頃までの間に中立ちを目標とします。

後入りを六時半では手燭の交換は明る過ぎ、七時前後が程良い頃と思います。濃茶の頃にはしっかりと暗がりの中で小灯の明かりも映え、湯の沸く音と濃茶を練る僅かな音の気配とが夕ざりならではの御馳走時間にごさいます。コロナ世情やむを得

ずの各服点とも別れを告げ、久々に練るという幸福感にしばし浸ります。

こういった一連の流れを部屋内と外路地の明かりの塩梅というもののなかなか一筋なわではいかず、だから面白いとも言えるのでしようが。とは申しましても、やはり場を重ねるほどに悩みの尽きぬ夕ざりにございました。

大徳寺は瑞峯院にての三日間、初日は片付けと翌日の準備をあれやこれやで門を後にする頃には午後十時に至っておりました。瑞峯院様には御協力、御理解を賜っての一日一席、改めて心より感謝申し上げます。

千葉の東金にては、京都よりは三十分ほど日の入りも早く、変わりゆく時を刻むという気配との呼応、お見送りまでの景色がさらりと調いますように…、更なる目標にごさいます。

梅雨間近き時節であったゆえ、水をテーマとし、床には「淡き水の如く」を賭けさせて頂きましたが、如心齋の残された言葉

の一文に「茶の心は浅き味よし、例えば水の方円に従い、又、止まりもせず、流れもせず、何ともあらぬ所にこそと、淡きところを味へとの心なるには、茶事を理窟にはめ六ヶ敷扱ふはよろしからず」とあります。言われていること、よくよく解ります。解ります故に、なかなか、なかなか…にごさいます。汲めども尽きぬ。尽きぬどころか、益々遠くになり逝くこちさえする今年の水無月茶事模様にごさいました。

ついでに今一文、如心齋の残されし言葉も書き添えておきましょう。

「茶の湯の懐石に料理などはさして構いなしと云ふは、心得違いなり、茶の湯の働きを稽古すると言うは、料理の組み様随分心をつけられたし、習えば自然と働きたいものなり、なる程極意には其の事は無ければ、上手の事なり、茶の湯上手になれば、料理も手前も何もかも同拍子なる物なり、只茶事は綺麗にすぎあげたる様に致しきものなれば、其の心持ち肝要なり」…と、

先人の残してくれし言葉の重み、骨にも身にも、指先の末端のまでも漆み入る、八十路の道程にございます。

お客様の亀相は、亭主の亀相、半東さん水屋方、台所方の亀相も皆々亭主の亀相、八十路の老いを楽しみつつ亭主模様、胸奥深くに覚悟を沈めての一席一席にございます。

仕上げなき世界、せめてもの亀相の少なきことを願い、集う皆々様の健やかであらんことを祈りつつ、淡き水の如き、さらりと茶事を楽しみたまき…と。

今年の茶道手帳に「茶道文化の未来に向けて」という一頁がありました。

そこにはこの二十五年ほどで茶道人口が約九十二万人に減ったとあります。これは、かつての三分の一ほどになったということ。そして、現状はその四割近くが六十五歳以上であり、急速に高齢化が進んでいることがあげられています。

日本の伝統文化が凝縮されているといわれている茶道の未来につなげる為には、高年齢層から中・若年層への継承が不可欠であるということ、そのためのアプローチはどうすれば良いのだろうか…という問いか

けです。

それにはフロントに立ち、茶道の魅力を伝える機会を意図的に作り出し、増やしていただくことはできないだろうか…と、茶道は書道や華道に比べて作品が残るわけではないが、長年稽古を積んでこられた先輩方は、茶道を実践することで得られるある種の充足感をよくご存じのはずである…と、

の充足感こそ茶道の大きな魅力であり、それをいかに自分の言葉に消化して伝えることができるかがポイントになるように思われる…と、時代のインフルエンサーに働きかけることの実現性の高さ、それなりの効果と期待等、茶道を他の分野と結びつけることを視野に入れ、無形文化遺産にも登録された和食、特にこの場合は懐石をさすと思われるのですが、他にも能や香道とのコラボなど、次世代につなげるべくフロントに立って、日本文化を体験できる場を提供していくべきだと思っております。

日本の伝統文化を趣味とし、自分を見つめ直すための時間作りと捉えているという茶道を未来につないでいく機運の醸成につながるものにしていくために、私達は茶道文化の活性化のために、従来の枠を越えて、

アプローチを模索していく必要があるのだろうか…と。

誠に誠に心痛むほどに常々危機感を抱いており、願っております、祈りつつ一服の時を重ねております。

日本人みんなの文化遺産であり、世界中にも類を見ない、誇るべき心の働き、心入りの深い文化なのですから…。

拙庵に通いにくれている方々もお茶の心をさがし、そして、求め得たならば、それを実践の場に移し、具体的にフロントに立って行動すべきだと…。であるが故に、只今は具体的に背中を押すことを役目といたしております。

前号で黒庵のことを記事にさせて頂いたのもそう、皆々、御自分の身の丈にあった楽しい一服の時を具体的に実践してほしく、心より皆さんの活動を希っております。文化とは続けることで継つてくと…信じたいですから！